

戦後学校体育理念の形成過程に関する一考察 —岡崎高等師範学校と雑誌『体育文化』—

宗野 文俊*

A Study on the Formative Process of Philosophy for PE after World War II —Okazaki Higher Normal School and Journal “Culture and Physical Education”—

Fumitoshi SOUNO*

【要旨】

本稿では、戦時体制下で創設された岡崎高等師範学校設立の背景や教育理念を関係資料にもとづいてその内実を明らかにし、創設直後の岡崎高等師範学校に着任した浅井浅一のこの時期の論考を考察し、東海地方から雑誌『体育文化』が発刊された意義について検討し、戦後学校体育理念の形成過程について新たな観点から考察していくことを目的とした。

7年間という短命であった岡崎高等師範学校の「過去において日本の教育の発展を阻んできた古いものは潔く捨て、新しきよきものを育てる」気風と相まって、新たな学校体育の理念を形成していった。さらには、東京を中心とした中央集権的教育制度を打破するために、東海地区の研究者・教育者を中心に雑誌『体育文化』を刊行したことが推察された。

キーワード：体育の民主化、体育文化、浅井浅一、岡崎高等師範学校

はじめに

第二次大戦直後の学校体育は、戦前の軍国的主義的な体育を払拭するために、当時のアメリカ体育の中心的思潮であった経験主義教育を基盤とした「新体育」「民主体育」「児童中心の体育」といった方向へと大きく転換がなされた。しかしながら、この転換は外部的要因である占領政策の一環として行われ、学校体育という内部的要因における転換の実情については十分に把握されていない（丹下、1964）ところもある。

このような混沌とした状況において、終戦直後の東海地区で、1946年12月に『体育文化』という体育雑誌が刊行された（岸野、1973）。これは、戦中

の1945年4月に創設された岡崎高等師範学校の体育教官室を中心とした研究グループである体育文化会によって編纂されたものである。当時体育に関して定期的に刊行されていた雑誌は、戦前・戦中から継続して発刊されてきた『学徒体育』（1946年より『新体育』と改題）のみであり、東京高等師範学校体育教官室編集による雑誌『学校体育』も創刊は1948年1月であることから、終戦直後の物資不足で紙の調達も簡単ではなかったであろう時代における地方の体育研究グループによる雑誌の刊行は、非常に意義深いものであったと考えられる。『体育文化』は1949年11月には実質的に廃刊となってしまうが、約3年における論考を再検討することは、終戦

* そうの ふみとし 相模女子大学学芸学部子ども教育学科

直後の日本における体育思想の転換および出発点にどのような変化が生じていたのかを検討することは非常に重要であると考えられる。

この研究グループの中心的役割を担っていたのは、1945年4月の岡崎高等師範学校創設直後に教授として着任した浅井浅一であった。浅井は、戦後の体育研究において体育の民主化と科学化を主張し、日本の学校体育および体育学を先駆的に支えた代表的な人物の一人である（丹羽、1996）。戦後の体育界をリードしてきた浅井が戦後の転換期に過ごした岡崎高等師範学校教授のときに、どのように日本の学校体育を構想するに至ったのか検討することは、現代の多様化・複雑化した学校体育のあり方を再考するうえで重要な視座を示すことが可能になると考えられる。

中等学校教員養成のために1945年4月に創設された岡崎高等師範学校は、戦後の学制改革の波に吞まれて名古屋大学教育学部に包括合併されて1952年3月に閉校となり、約7年という短期間に存在した高等師範学校である（校誌発行委員会編、1950；黎明会編、1977；山口、2004）。当初は理科（数学・物象・生物）の学科のみが設置され、戦後の1947年に文科（社会・英語）の学科が新設されたが、体操（体育）は各科共通のいわゆる一般教養の科目として週2コマの授業が配当されているものであった。体操（体育）科の専科教員を養成する教育課程が置かれていないにもかかわらず、岡崎高等師範学校では終戦直後に『体育文化』という雑誌を刊行することになったことは非常に意義深い。

そこで、本稿では、戦時体制下で創設された岡崎高等師範学校設立の背景や教育理念を関係資料にもとづいてその内実を明らかにし、創設直後の岡崎高等師範学校に着任した浅井浅一のこの時期の論考を考察し、東海地方から雑誌『体育文化』が発刊された意義について検討し、戦後学校体育理念の形成過程について新たな観点から考察していくことを目的とした。

1. 岡崎高等師範学校について

岡崎高等師範学校は、理科系の中等学校教員の養成を目的として、1945年4月1日に創設された。これは、東京（1886年創設）、広島（1902年創設）、金沢（1944年創設）に続く4番目の、そして最後の高等師範学校として誕生した¹⁾。その後、戦後の学制改革によって、1949年5月に名古屋大学岡崎

高等師範学校となり、1952年3月31日に廃止と、その創設から廃止までわずか7年間存在した高等師範学校であった。ここでは、戦時期・終戦・戦後改革期という激動の7年間に存在した岡崎高等師範学校とはどのような学校だったのか、その設立の背景や教育課程に込められた理念などから、岡崎高等師範学校における体育理念の原点を探っていきたい。

1908年に奈良女子高等師範学校が設置されて以来、約35年間高等師範学校は4校（東京・広島・東京女子・奈良女子）しかなかったが、この間に中等学校への進学者は急増しており、中等学校では慢性的な教員不足の状態が続いており、特に理科系の教員が不足するという状況であった²⁾（山口、2004）。このような機運から、1925年には帝国議会に「岡崎市二高等師範学校設置二関スル建議案」が提出、可決され、実現には至らなかったがそれ以降も愛知県岡崎市では設置運動を継続し、1944年4月に理科系教員養成課程のみを置く金沢高等師範学校が創設されたことで、これを先例としてあらためて1945年2月に「岡崎市に高等師範学校を設立すべき建議案」が帝国議会に提出・可決され、1945年4月に金沢高等師範学校と同様に理科系教員養成課程のみを置く岡崎高等師範学校が設置されることになった³⁾（山口、2004）。表1は、岡崎高等師範学校創設から廃止までの略年表である。

戦時体制下に創設された岡崎高等師範学校は、国策に対応したうえで教育費を切り詰めて設置されたため、設立当初から大きな困難の連続であった。表2は、岡崎高等師範学校設置時における毎週授業数（予定）と所要教官数を表している。創設初年度には教授13名、助教授4名、助手1名の計18名の教官が配置されることになっていたが、創設された1945年4月1日付で発令された教官は水野敏雄校長のほか、松原益太（植物学）・関野豊三（教育学）・七里公章（哲学）の3名のみで、しかも初めて4人がそろったのは4月10日のことだった（岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編、1999）。その後、4月20日になって渡辺實（歴史学）と浅井浅一（体育学）の2名が着任するなど、事務職員も含めて次第に充実してきたが、初年度で教官定員を満たすことはなかった（山口、2004）。

また、同年7月20日に岡崎市は米軍による空襲を受けて校舎のほとんどを焼失してしまい、生徒の動員先である豊田自動車工場青年学校で7月30日に第1回入学式を行うほどであった。終戦後、仮校

表1 岡崎高等師範学校の創設から廃止までの年表

年	月日	関係事項
1925(大正14)	3.24	「岡崎市二高等師範学校設置ニ関スル建議案」第50回帝国議会に提出、可決
1944(昭和19)	10.27	岡崎市議会「高等師範学校設置に関する議案」可決
1945(昭和20)	2.	「岡崎市に高等師範学校を設置すべき建議案」第86回帝国議会通過
	3.28	勅令第131号で高等師範学校官制改正 岡崎高等師範学校設立決定
	4.1	設立認可及官制公布、仮事務所を愛知第二師範学校内に設置、校長水野敏雄ほか3教授発令
	4.30	第1回入学志願者願書締切、入学定員140名に対し総志願者3,214名
	5.10	事務所を旧市立工業学校に移転
	5.13-15	第1回入学試験実施
	7.2	第1回生入学(理科1部・2部・3部、約150名)
	7.20	米軍による岡崎空襲で全校舎焼失
	7.30	豊田自動車青年学校で第1回入学式挙行
	8.4	豊田工場にて動員作業開始、かたわら僅かに講義開始
	8.15	ポツダム宣言受諾、終戦の詔書渙発される
	9.16	宿舎を勝鬨寺に設営、「振風寮」と命名
	10.1	三菱重工業針崎工場青年学校で講義再開
	12.9	豊川市牛久保町、旧豊川海軍工廠工員養成所(約4万坪)及寄宿舍(約2万坪)に移転
1946(昭和21)	2.11	「学問の自由」等の決議文を学長に提出、翌日から48時間聴講拒否
	2.25	食糧不足のため1週間休講
	5.15	教職追放令により水野校長退職、松原益太教頭に校長事務取扱を命ぜられる
	5.23	第2回入学許可者114名発表
	5.27	食糧事情悪化のため1週間休講
	6.6	松原益太に校長発令
	6.10	第2回入学式挙行
	11.10-12	第1回創立記念祭(寮祭、弁論大会、運動会)
1947(昭和22)	4.1	新学制(6・3・3・4制)発足、新たに文科第1部(公民・歴史)第3部(英語)増設、附属中学校設置
	4.22	学則改正 部科制を廃止し社会科、英語科、数学科、物理科、化学科、生物科と改称
	5.1	第3回入学式挙行
	5.10	学生自治会発足
	6.27	大学建設期成発足大会挙行(～9月まで)
	10.18-29	第2回創立記念祭(寮祭、弁論大会、文化祭、講演会、陸上球技大会)
	12.5	大学建設昂揚大会開催
1948(昭和23)	5.1	第4回入学式挙行、入学者180名(うち女子4名)
	6.22	文部省1府県に1大学設置など国立大学設置の11原則を発表
	7.10	全国高等師範学校連盟結成
	11.3-8	第3回創立記念祭(寮祭、運動大会、演芸祭、教育心理展、物理展)
1949(昭和24)	2.11	振風寮寮規改正、名古屋大学受入委員会発足
	3.20	第1回卒業証書授与式挙行(数学科26名、物理科15名、化学科38名、生物科31名、計110名)
		図書館新館開館
	5.16	国立大学設置法等について学生大会開催、19日にストライキ実施
	5.31	国立大学設置法により名古屋大学に包括され、名古屋大学岡崎高等師範学校と改称
		名大豊川分校を併設
	6.18	交友会・自治会・共済会合併に関して学生大会開催
	7.1	名古屋大学豊川分校学生会発足
	7.11	名古屋大学学長に勝沼精蔵就任
	7.22	名古屋大学豊川分校に名古屋大学教養部316名が配置されて第1回入学式挙行
	7.29	松原益太校長が名大豊川分校主事兼任
	10.29-11.3	第4回創立記念祭(寮祭、体育祭、講演会、音楽コンクール)
	11.5	岡崎高等師範学校同窓会発足
1950(昭和25)	3.25	第2回卒業証書授与式挙行(数学科30名、物理科33名、化学科30名、生物科31名、計124名)
	3.31	附属高校設置
	11.3-5	第5回創立記念祭(運動会、寮祭、ファイヤー・ストーム)
1951(昭和26)	3.25	第3回卒業証書授与式挙行(社会科35名、英語科21名、数学科30名、物理科31名、化学科17名、生物科30名、計164名)
1952(昭和27)	3.25	第4回卒業証書授与式挙行(社会科30名、英語科18名、数学科20名、物理科16名、化学科27名、生物科22名、計133名)、続いて閉校式挙行
	3.31	岡崎高等師範学校 閉校
	4.1	附属中学校・附属高等学校は名古屋大学教育学部に移管

※ 黎明会編(1977)、岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編(1999)、山口(2004)にもとづいて筆者が作成

舎での教育活動が進展するにつれて本格的な移転先の確保が必要となり、1945年12月に愛知県豊川市の旧海軍工廠工員養成所関係施設へ移転し、閉校まで豊川市に学校が置かれた。

このような状況下での岡崎高等師範学校の内実は、どのようなものだったのだろうか。創設当初からの教授であった七里公章は、後に以下のように回想している（黎明会編，1977：p. 11）。

本校は戦時中戦力増強を目的とした「科学技術指導者養成」の国策に便乗して出発したが学則の内容に微塵もそうした傾向はなく、戦時中の専門学校としては珍らしく一般教養科目が10科目も必修として課せられ、数学、物象、生物の三学部専門科目も基礎知識の修得を専ら目的として配列されていることに特に注意されたい。これには私の想像を逞うすることを許していただければ、教育学を専攻され、長年旧制高校、東京女高師等の教授を歴任されて学識と経験を豊富に持たれた本校初代校長水野敏雄先生が、その当時はまだ文部省の督学官として居られ、また、教学課長として居られたので、学科課程の作製にもタッチされたのではないだろうか。これは私の勝手な推測であるが、学則の内容が戦時中としてはまことに旧制高校のような自由で一般教養的な傾向が強く、而も初代校長として赴任された水野先生の教育方針に不

思議にも符合するように思えるからだ。

このようなことは、初代校長の水野敏雄による教授人事にも反映されている。「まず学校運営にあたって中心的役割を果たしてくれる三人の教授人事をすすめ」、その人事の原則には「出身大学にとらわれず、それまで学問と教育の両面にわたって活躍してきた実績を重視し、岡崎高師の困難が予想される未来を学生とともにきり拓いていってくれることが期待できる人を選」び、「水野校長としては当時の『戦力増強』策の即戦力となる教員を養成しようとしたのではなく、『人間を育てる本物の教育』を実現したい、と願っていた」（中野，2015：pp. 120-121）という指摘からも、当時としては革新的な教育方針が掲げられていたと推察される。

また、水野校長を中心とした教授会側では、戦後日本の教員養成・教師教育制度について集中的な研究検討を始め、1946年5月に公職追放令により水野校長が退職となったが、二代目校長の松原益太を中心として、1946年9月に政府の「教育刷新委員会」に岡崎高等師範学校から『教育制度改革の目標』という提言の文書が提出された。その内容は、以下のとおりである（岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編，1999：p. 314）。

- 一．中央集権的教育制度の打破
- 二．教育の計画化

表2 岡崎高等師範学校毎週授業数ならびに所要教官数
（岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編（1999：p. 32）をもとに筆者が作成）

要 項	1945(昭和20)年度				1946(昭和21)年度増加分				1947(昭和22)年度増加分				1948(昭和23)年度増加分				合 計	1945(昭和20)年度所要教官数			
	数 学	物 象	生 物	小 計	数 学	物 象	生 物	小 計	数 学	物 象	生 物	小 計	数 学	物 象	生 物	小 計		教 授	助 教 授	助 手	講 師
修身公民	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	32	1			
教 育	1	2	1	4	1	2	1	4	2	4	2	8	2	4	2	8	24		1		
心 理	2	4	2	8	1	2	1	4									12	1			2
哲 学	1	2	1	4	2	4	2	8									12				
物 象	3	16	4	23	6	22	4	32	4	48		52		52		52	159	3			
数 学	9	8	2	19	9	8	2	19	20	4		24	24			24	86	1	2	1	8
生 物	3	6	9	18				9			24	24			24	24	75	2			
国民科	3	6	3	12	3	6	3	12								24	1	1			
外国語	6	12	6	24	6	12	6	24	2	4	2	8	2	4	2	8	64	2			
教 練	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	32	2			
体操及武道	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	32				
修練	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	2	4	2	8	32				
計	36	72	36	144	36	72	36	144	36	76	36	148	36	76	36	148	584	13	4	1	10

備考 一．物象科ハニ学級其ノ他ハ一学級編成トス
二．教育実習ハ第四学年第二学期中ニ於テ之ヲ課ス
三．修練ハ教科ノ教官ガ交互ニ之ニ当ルモノトス

- 三. 各種教育機関に於ける人的組織及び物的施設の整備
- 四. 中等教育制度の刷新とその大衆化
- 五. 高等学校, 大学予科の廃止と専門学校の地位の向上
- 六. 教員養成機関の拡充と内容の刷新
- 七. 教育者の地位の向上
- 八. 社会教育の組織化
- 九. 教育行政機構の民主化

「教育刷新委員会」には多くの組織や団体, 個人から要望・改革提言が寄せられたが, 当時存在した7つの高等師範学校において, 単独で改革案を提出したのは岡崎高等師範学校からだけだった。しかも, その内容はまことに斬新で, 「過去において日本の教育の発展を阻んできた古いものは潔く捨て, 新しきよきものを育てる具体的方針をあきらかにし」(中野, 2015), 初代校長の水野敏雄から二代目校長の松原益太, さらに岡崎高等師範学校の教官, 職員, 学生へと受け継がれた誇るべき歴史的遺産であった。

戦後の教育改革の中で, 結果的に岡崎高等師範学校は名古屋大学教育学部に包括合併することとなり, 1949年5月31日に新制名古屋大学の発足とともに「名古屋大学岡崎高等師範学校」と改称し, その後の3年間は制度上旧制の「岡崎高等師範学校」と新制の「名古屋大学豊川分校」が並存した時期であった。そして, 1952年3月25日に閉校式が挙行され, 岡崎高等師範学校は7年という短い歴史に幕を閉じることになった。あわせて531名が岡崎高等師範学校を卒業し, 愛知県をはじめとした東海地区を中心に, 日本全国の戦後の中等教育の一翼を担う人材を輩出した。

戦時体制中に創立したにもかかわらず, 困難に対して前を向いて立ち向かっていく革新的である岡崎高等師範学校の校風は, 一般教養科目の体操・体育の教授として赴任した浅井浅一に多大な影響を与えていたと考えられ, 戦後の学校体育を構想するうえで重要な観点を見出してきことが推察される。

2. 浅井浅一について

1945年4月に岡崎高等師範学校へ着任した浅井浅一は, 戦時体制下から戦後の民主化という大きな転換期に, 学校体育のとらえ方をどのように変化させてきたのだろうか。

浅井浅一は, 1908年5月19日に現在の新潟県五

泉市で生まれた。1932年に東京高等師範学校を卒業して滋賀県女子師範学校に赴任, 約3年間勤務した。その後, 東京文理科大学へ入学して1938年に卒業, 東京府立第三中学校教諭として2年間従事し, 1941年に東京高等師範学校に助教授として赴任した。学生時代には棒高跳の選手としても名を馳せ, 東京文理科大学在籍時には極東オリンピック大会の日本代表選手にも選ばれた(近藤, 1974; 丹羽, 1996)。そして, 1945年に乞われて新設された岡崎高等師範学校に教授として栄転した(今村, 1974)。また, 1946年には文部省学校体育研究委員会委員に任命され, 「学校体育指導要綱」の作成にも携わってきた(学校体育研究同好会編, 1949)。その後, 学制改革に伴って1949年に包括合併された名古屋大学教育学部教授となり, 岡崎高等師範学校が閉校する1952年に奈良女子大学へと転じ, 1972年に定年退職するまで20年間を過ごした。その間に奈良女子大学附属小学校長, 附属中学・高等学校長を10年間併任し, 学校教育の現場や実践にも貢献してきた。さらには, 1966年には『運動遊戯集団の構造と機能についての研究』を学位請求論文としてまとめ, 東京教育大学から教育学博士が授与され, 1974年8月12日に66歳で亡くなるまで体育学研究においても大きな影響力を与え続けていた⁴⁾。

浅井は, 終戦直後の体育をどのようにとらえていたのだろうか。戦前・戦中の体育について, 戦後の浅井は以下のように述べている(浅井, 1947: pp. 36-37)。

昭和十六年我が国の学制は改革され, 体育という言葉は体錬という言葉に改められた。体錬は心身一体の修練を目的とした。体錬は精神と身体を二元的に分離して考えることを誤りとし, 学問も心身の錬磨であるように, 体育も亦身心の錬磨であると考えた。人となる真となる学問は体育を行す実践性からも当然自覚されて来なければならないものであるとした。

かくして, 従来, 観念的に体育の根本原理を求めて来た我が国の体育は, それを心身一体論より導き出そうとしてきた。しかし, この心身一体論の原理に対して, 哲学的批判を誠実に加えているならば恐らく危険はなかったのであろう。けれども不幸なことにはこの根本原理が日本人的自覚の昂揚と共に独善的な傾向をとるよ

うになったのである。批判的方法は否定された。…（中略）…また、デモクラシーの精神によって育てられて来たスポーツは、全体主義思想に影響せられ、思想に対する抵抗力の未だ弱かった我が国の体育は、体育において自主性を持つまでに至らなかったために、ついに戦争遂行の手段に利用されるようになってしまった。

科学的基礎によって出発した体操の概念は、生物学的教育論を基礎とした体育の概念に発展し、道徳主義、人格主義の教育思想によってその体育は内容的に発展し、更に社会的教育学によって一層の進歩を見るようになった。…（中略）…体育の根本原理は科学的演繹的方法によって研究され進歩して来たのである。その演繹的方法が批判的であるかぎり更に体育の原理は発展していくに相違ないであろうが、あやまれる日本の自覚は、ついにこの批判的演繹の方法を捨てて、ついに独善的原理をもって演繹する方法を旺歌したのである。今こそ国民は、国敗れて惨ありの悲しみをしみじみと感じているのである。（旧字体は新字体に変更して表記）

このような戦時体制下の反省にもとづいて、浅井は終戦直後にこれからの体育の課題について、体育思想の発達歴史的発達にもとづいて以下のように述べている（浅井，1945）。

体育は身体を対象としての教育ではあるが、身体とは前述のように、健康なる身体と働く身体とが統一されているものである。斯る身体観に徹することによって、体育に幅と深さが与えられ、従って体育の可能と限界が明確になって来る。…（中略）…体育は身体を中心にして、外的にも内的にも拡大発展しつつ然も常に身体と遊離しない教育作用である。されば機械⇄身体⇄精神の教育作用は、絶えず幅と深さを拡大させていく極めて動的な教育活動である。

（旧字体は新字体に変更して表記）

また、浅井はその身体観をさらに発展させて、以下のように論述している（浅井，1946b）。

体育そのものは文化的様相によって具体的にになっている。先ず体育は社会的性格を現している。…（中略）…全ての社交的遊戯やスポーツ

はフェアプレイの精神を強調し、スポーツマンシップを唱導し多くのルールを規定し社会的秩序を安定するような徳性を守り育てた。茲に社会性を陶冶する道徳性が発達した。…（中略）…独りで楽しむスポーツは内的な精神と深く結びつき、修行としての体育、道としての体育を生む。此の体育は宗教的世界と連る。又一方では、技術が体育の魅力である。さればこれまで美を体育の理念とした体育家も多い。…（中略）…芸術的であることは舞踊だけではなく体育一般の文化的様相なのである。

このように体育文化は、道徳、宗教、芸術の様相によって、吾々の生活に変化と多様性を現しながらも、矢張り、体育なるが故に、各々がその本質に於て統一を保っている。

（旧字体は新字体に変更して表記）

このときの浅井の言説は、終戦直後の時期から体育の文化性について言及しており、後の彼の体育思想（浅井ほか，1949；浅井，1961）の原点として位置づけることができると考えられる。

3. 雑誌『体育文化』について

後年に浅井の業績を評価するうえで、1946年に戦後初の体育雑誌『体育文化』を刊行したことが挙げられている（梅田，1974；近藤，1974；丹羽，1996）。終戦直後にいち早く体育文化に着目したことに対しての評価であるが、実際の著者や論考の内容についてはほとんど言及されていない。ここでは、雑誌『体育文化』の内容を概観し、特に創刊号に着目してその特徴と意義について検討してみたい。

1946年12月に、岡崎高等師範学校体育教官室を中心とした研究グループである体育文化会による編集、愛知県豊川市のライト書房の発行によって雑誌『体育文化』は刊行された。1949年の第4巻第4号から愛知県体育指導者連盟機関誌となり、実質的に廃刊となる第4巻第11号まで発刊された。表3は、各巻号の著者とタイトルを一覧にしたものである。

創刊号では、この雑誌を刊行する意気込みが現れている。巻頭言では、研究グループの代表である浅井浅一が以下のように述べている（浅井，1946c）。

新しいことを求めることは、古い窮屈なものから解放されようとするものである。けれども自由を求め過ぎると、そこに責任を盡し得ない

巻号	発行年月日	著者	タイトル	ページ
1(1)	1946(S21)12.20	浅井浅一	巻頭言 若き体育者へ	
		松原益太	体育と文化	1-3
		塩澤幹	体育文化会に寄せる	4-5
		浅井浅一	スポーツの責任	6-10
		橋本正一	身体観と体育	11-16
		間部菊栄	学校舞踊の一課題—舞踏史から学ぶ—	17-19
		加藤金作	律動体操の形式と作品的意義	20-24
		能勢修一	健康教育の基礎的問題	25-29
		吉村三笠	東海陸上競技界の回顧	30-31
			投稿募集・体育文化会規約	32
1(2)	1947(S22)06.25	橋本正一	編集後記	
		浅井浅一	巻頭言 人間性を伸ばせ	
		浅井浅一	体育と教育	1-7
		小林宗作	明日の律動体操	8-16
		水野義男	カザリズム講義—科学者より体育者へ—	17-22
		塩田芳久	スポーツと性格	23-28
		佐々木久吉	籠球の研究(一)	29-36
			投稿募集・体育文化会規約	37
		橋本正一	編集後記	
		橋本正一	巻頭言 指導要領は要求する	
1(3)	1947(S22)07.25	前川峯雄	体育におけるエキスポメンタリズム	1-7
		梅田利兵衛	遊戯に於ける自然意識の発展	8-14
		増田英男	体育以前—H氏へ	15-18
		大野武治	排球のパス	19-24
		阿部三亥	スポーツ再建への基礎条件	25-29
		浅井浅一	体育への道—体育の科学的方法	30-32
		橋本正一	編集後記	
		浅井浅一	スポーツと生活	
		橋本正一	体育の目標と遊戯	1-9
		佐々木久吉	女子のスポーツ	10-15
1(4)	1947(S22)08.25	体育文化会研究部	小学校の於ける衛生	16-20
		浅井精一	育心界	21-27
		浅井浅一	体育への道—新しい体育の道	28-31
		橋本正一	編集後記	
		浅井浅一	体育方法論上より見たアドルフ・シュビース	1-9
		橋本正一	体育の目標と遊戯(2)	10-27
		体育文化会研究部	小学校の衛生の指導資料(2)	28-31
		鹽田芳久	学習結果の測定と評価	32-34
		橋本正一	編集後記	
		七里公章	道徳の再建とスポーツ	1-6
1(6)	1947(S22)10.25	佐々木久吉	スポーツ論	7-14
		能勢修一	健康教育と農村(ある農村の実体から)	15-18
		佐藤和兄	家庭体育の構想	19-20
			体育相談室	21-22
		橋本正一	体育の目標と遊戯(3)	23-29
		体育文化会研究会	小学校衛生の指導資料(3)	30-31
			編集後記	
		阿部三亥	体育学への社会的感情	1-6
		池田康夫	学習と指導への一考察	7-13
			運動会雑記	14-16
1(7-8)	1947(S22)12.25	佐々木久吉	籠球の研究	17-27
		金子藤吉	体育雑感	28-31
			体育相談室	32-33
		増田英男	舞踊展望	34-40
		橋本正一	体育の目標と遊戯(完)	35-51
		浅井浅一	地方に於ける学校体育の活動を観る	52-64
			編集後記	
		佐々木久吉	新しいスポーツの構成について	1-8
		梅田利兵衛	青年期に於ける社会的調整の要因としての身体的能力	9-17
		塩田芳久	学習結果の測定と評価	18-23
2(1-2)	1948(S23)02.25		体育相談室	24-25
		浅井浅一	地方に於ける学校体育の活動を観る(完)	26-36
		佐藤和兄	新しい体育館の説明	37-45
		紹介 小学校体育の目標		46-49
		橋本正一	チーム・ゲーム(球技)の構成	50-60
			編集後記	
		佐々木久吉	籠球の研究(完)	1-15
		浅井浅一	ある体育主事の手記	16-20
		紹介 体育の測定		21-23
		本間吉隆	農村に於けるレクリエーション	25-26
2(4-5)	1948(S23)05.25	佐藤和兄	新しい運動分類法—運動学的見地を基準として—	27-33
		小林隆三	学校体育の諸問題	1-13
		千田敏	現代スポーツ観	14-16
		天野菊三郎	水泳の初心者指導	17-22
		田中正一	体育に於ける諸問題	23-30
		鈴木菊雄	フエアレイの精神と試合の転引—その矛盾解決への一つの試み—	31-36
		佐藤和兄	歌謡体操	37-41
		紹介 体育の測定(完)		42-45
		倉内一二	体育漫筆	46-48
		原田秀雄	庭球の研究(その一)—打球技術の構成—	49-58
2(6-7)	1948(S23)07.25	浅井浅一	学校体育の指導管理	1-11
		天野菊三郎	送球指導	12-15
		原田秀雄	庭球の研究(その二)—基本練習の指導—	16-26
		小林隆三	療育の生理	27-37
		田中正一	体育に於ける諸問題	38-49
		谷山正夫	野球選手の心構について	50-52
			編集後記	
		佐藤正	体育における精神衛生の問題—特に異常行動について—	1-4
		高橋芳太郎	体育のフロンティア	5-11
		森茂雄	体育測定の理論	12-18
2(10)	1948(S23)10.25	小林隆三	新制中学校に於ける課外運動と校内競技	19-33
		天野菊三郎	送球の攻撃と防禦	34-41
		鈴木紋吉	バレーボール	42-47
		瀧美雅朗	野球に於けるバント戦法	48-53
		田中正一	新しいハイキングの試み	54-58
			編集後記	
		佐々木久吉	スポーツする人・観る人・教える人のためのしおり	1-9
		小林隆三	性教育の問題	10-20
		浅井浅一	体育と生活指導	21-28
			『新体育』に就いての座談会	29-37
2(11)	1948(S23)11.25	丹下保夫	体育とレクリエーション(其の一)	1-9
		田中正一	運動会の在り方に就いて	9-13
		編集部	紹介 教材選択の基準	14-18
		佐藤和兄	体育の探るべき生命の範疇と『健』の価値的考察	19-31
			編集後記	
		浅井浅一	閑暇と指導	1-5
		丹下保夫	体育とレクリエーション(其の二)	6-14
		佐藤和兄	体育の探るべき生命の範疇と『健』の価値的考察(続)	15-25
		東海林駿士	冬季運動について	26-31
			編集後記	

巻号	発行年月日	著者	タイトル	ページ
3(1-2)	1949(S24)01.25	高橋芳太郎	近代体育の形而上学	1-7
		河合彌太郎	統計法の概念	8-17
		佐々木久吉	アメリカの教育(一)	18-25
		浅井浅一	岡崎市根石小学校の記	26-33
			体育メモ 単元と運動部の問題	36-38
			編集後記	
		浅井浅一	身体活動から経験活動へ	1-4
		森茂雄	走運動のテスト	5-12
		鈴木菊雄	故きを温ねて一試合に対する態度と試合絶対境—	13-17
		佐々木久吉	アメリカの教育(二)	18-28
3(3)	1949(S24)02.25	福井清	健康増進に就いて	29-33
			講習会便り	34-37
			編集後記	
		浅井浅一	健康教育と体育の目的	1-7
		佐々木久吉	体育カリキュラムのスコープとシークエンス	8-16
		浅井浅一	余暇の指導	17-19
		橋本正一	体育測定の整理—その理解のために—	20-27
		浅井浅一	指導と管理	28-32
			編集後記	
4(4)	1949(S24)04.25	浅井浅一	精神衛生と体育	1-6
		佐々木久吉	アメリカの教育(三)	7-12
		浅井精一	ガイダンスに於けるケース・スタディについて	13-22
		森茂雄	陸上競技場の設計	23-28
		研究部	スポーツ学講座(一)	29-32
			編集後記	
		浅井精一	進歩的小学校のカリキュラムに於ける体育計画について	1-11
		佐々木久吉	アメリカの教育(四)	12-19
		森茂雄	アメリカの体力テスト	20-27
		研究部	スポーツ学講座(二)	28-30
4(5)	1949(S24)05.25		編集後記	
		浅井浅一	機関誌を迎えて	1
		塩澤幹	発刊を祝して	2
		岡部久義	体育発展のために	3-4
		高橋清五郎	学校体育の現状とその発展	5-12
		筒井健市	新制大学に於ける体育の運営	13-15
		研究部	スポーツ学講座(三)	16-19
		杉田芳郎	競泳練習について	20-24
		古知野北小学校	学校体育施設について	25-28
		甲山中学校	施設の少ない学校に於ける体育の実態	29-32
4(6)	1949(S24)06.25	松栄小学校	戦災校に於ける体育の現状	33-39
		三輪中学校	学校ダンスの実態	40-42
		佐々木久吉	アメリカの教育(五)	43-48
			読者の声・編集後記	
4(7)	1949(S24)07.25	浅井浅一	健康教育の計画化	1
		松本千代栄	問題の提出—ダンス—	2-5
		浅井浅一	体育による子供の指導	6-9
		高橋芳太郎	新体育のノート	10-14
		研究部	スポーツ学講座(四)	15-17
		佐々木久吉	アメリカの教育(六)	18-26
		森茂雄	アメリカの体力テスト(続)	27-33
		名古屋市立小学校体育教育研究会	新しい衛生教育への歩み	34-47
			編集後記	
4(8)	1949(S24)08.25	浅井浅一	運動会に望むもの	1
		浅井浅一	運動会の在り方	2-5
		岡部久義	運動会の経営	6-12
		野田稔	フォークダンス	13-17
		浅井精一	運動会のゲーム	18-22
		美濃部栄	合同体操	23-27
		八木菊郎	巧技	28-34
		森茂雄	スポーツとレクリエーション	35-41
		三岡誠三	高原の生活—学習指導法について—	42-45
		長篠小学校	遊戯の研究	46-48
4(9)	1949(S24)09.25		編集後記	
		浅井浅一	徒手体操	1
		美濃部栄	徒手体操はなぜ必要か	2-5
		浅井浅一	徒手体操の発達	6-12
		森茂雄	徒手体操にはどのようなものがあるか?	13-16
		岡部久義	徒手体操はどの様に指導するか	17-19
		山田彰	小学校五六年の徒手体操の指導	20-22
		原田秀雄	中学校における徒手体操の指導	23-27
		佐々木久吉	アメリカの教育(七)	28-32
		編集部	リード・アップ・ゲーム(野球型)	33-40
4(10)	1949(S24)10.25	向山小学校	徒手体操指導の実態	41-46
		浅美小学校	体育活動の自主的経営の研究	47-48
			編集後記	
4(11)	1949(S24)11.25	中島兵一	巧技	1
		浅井浅一	学校体育におけるスタントの位置	2-5
		森茂雄	巧技の種類	6-10
		美濃部栄	巧技の指導	11-18
		小山兵衛	教育に於けるトレーニングの立場	19-22
		鈴木恒雄	スクエア・ダンスのテクニクについて	23-25
		岡部久義	タッチフットボール指導	26-29
		東海中学校体育部	わが校の体育指導	30-35
		佐々木久吉	アメリカの教育(八)	36-42
		編集部	リード・アップ・ゲーム(二)	43-48
4(12)	1949(S24)12.25		編集後記	

表3 雑誌『体育文化』各巻号記事一覧

- ※ 旧字体は新字体に変更して表記
- ※ 巻号は原典のママ表記
- ※ 創刊号から第4巻第6号まで体育文化会（岡崎高等師範学校体育教官室内）編集，第4巻第7号以降は愛知県体育指導者連盟機関誌として刊行

結果となる。自由と責任を唱導する民主主義の精神も茲にある。「我心のうちに闘うものあり」という言葉がある。奔放になり過ぎる気持を知性で制駁せねばならない。此の両者の振幅が大きいほど澁澁とした文化を展開することが出来る。この制するということは、型による強制ではなく能動的自制である。

求むると制する、解放と内省、とはよく考えてみれば、対立しながら同じ方向にいる。求めることは、多くを集めることを求めることではなく、中核はなんであるかを求めることである。それだけに、求めることが深くなるほど、求むることは少なくなり、緊張してくる。

我心に闘うもののある人達によって、我国の体育も新しく創造されることを確信する。それを私は若き体育者に期待している。

（旧字体は新字体に変更して表記）

また、創刊号の編集後記で、岡崎高等師範学校教授で編集代表者でもあった橋本正一は、以下のように述べている（橋本、1946）。

思想、叡智、科学の貧困と、逆に貧困な思想、叡智、科学とは、すべての禍乱を惹起する。一過去に於て、現在に於て、更に未来に於ても。前者からは理念は生まれない。後者から生ずる理論は、現実と共に生きていない、生命なき空論にすぎない。

過去を顧み、現在を見つめるとき、このことは体育界に、あまりにもピッタリとあてはまるではないか。

試みに、過去の（敢えて戦時中とはいわず）体育の様相を振り返って見よ。更に、毎日の授業を、自信をもって指導している体育家が今日果して幾人あるか、を想え。

真の叡智の恢弘、科学性の獲得、体育に即しというならば、本質的に体育観の確立、方法的には体系の確立、これなくしては体育界は、いつまでも昏迷と独断の底から救われないであろう。

われわれは従来偏狭な態度から脱却し、広く、深い他文化と活発に、且密接に交流してその内容に触れ、大らかな心で自らを育んでいくことが必要であり、かくてこそ情熱的な文化意欲と相俟って、ここに新しい体育が、文化現象として自ら創造されるのではなからうか。

民主的な客観性をもった真箇の体育は体育指導者の間に温醸される、意欲と努力、そこからのみ生れるであろう。それは、中央集権的機構からは生れ難いのである。この意味に於て、東北とはいわず、九州とはいわず、各地方にどしどし体育研究の団体が結成されなければならない。かくて、相互の切磋により、初めて独善を排し、正しき創造、発展を期することが可能となるのである。

（旧字体は新字体に変更して表記）

これらの記述から、学問としての体育学を構築してその独自性を確立することの必要性、さらには中央集権的教育制度を打破し、地方から新たな体育理念を創り出す気概に満ちていたことがうかがえる。

そして、創刊号の最初には岡崎高等師範学校二代目校長の松原益太による論考が掲載されている。松原（1946）は、戦前の体育を「戦争という時代的な影響に体育が利用せられ盲目的に引きずられて」行っており、「体育理念の内に毅然とした合理的、批判的な知性をもち自らを律していくという自主性を失った」と痛烈に批判したうえで、私見として「体育がその『在り方』に於てもっと理知的な企画を為しその結果の処理に器械的な数学的な更には生物学的なものを見出すとするならば、その実施の過程に於てはより自信をもってより迫力のあるものになるのではあるまいか」と提言し、「かように観て参りますならば正に文化を向上させる為の体育であることに相違なく、まだ時代的にどんな制肘が体育の上に加えられようともそれによって屈服されて自律性を喪失するような体育にはならない」として、多様な観点から体育理念をとらえ、自主性を重んじることで体育が文化として発展していくことを指摘した。こうした論考は、教育者の前に人間として成長するために一般教養を重視した岡崎高等師範学校の教育課程と重なるところである。このことは、岡崎高等師範学校初代校長の水野敏雄による教育方針にあった「古いものは潔く捨て、新しきよきものを育てる」といった、困難な状況であるからこそ前を向いて立ち向かって新たなものを構築していこうとする校風から導き出されていると考えられる。

さらに、この創刊号の著者は全員愛知県下の教員・教育行政関係者であった⁵⁾。戦前にあった東京を中心とした中央集権教育体制を打破するために、あえて地元の東海地区の研究者・教育者でこの雑誌を創

り上げていこうとしている意図がみえてくる。創刊号に限らず掲載記事の多くの著者は東海地区の研究者・教育者で執筆されており、学校現場での体育授業参観や実践報告、具体的なカリキュラムなども東海地区の小中高校での実践にもとづいた記事が掲載されている。

雑誌『体育文化』は、1949年11月に刊行された第4巻第11号を最後に休止、廃刊となった。編集後記では次号の内容の予告もなされており、突然の休止・廃刊の理由も不明である。1949年は岡崎高等師範学校が名古屋大学教育学部に包括合併されたときであり、あわせて研究グループの中心的役割を担ってきた岡崎高等師範学校体育教官室の主要な構成員が他大学へと転籍したことも⁹⁾、少なからず影響していることが考えられる。

おわりに

1945年4月に東京高等師範学校体育科から当時理科系教員養成校であった岡崎高等師範学校へと移った浅井浅一は、戦時体制下であらゆることが困難な状況の中、体育学だけにはとどまらない様々な観点からこれからの学校体育のあり方を構想していった。それは、7年間という短命であった岡崎高等師範学校の「過去において日本の教育の発展を阻んできた古いものは潔く捨て、新しきよきものを育てる」気風と相まって、新たな学校体育の理念を形成していった。さらには、東京を中心とした中央集権的教育制度の打破するために、東海地区の研究者・教育者を中心とした体育文化会を立ち上げて雑誌『体育文化』を刊行したのではないだろうか。東京高等師範学校、東京文理科大学を卒業した浅井には当然ながら中央とのつながりはあったと考えられるが、それ以上に岡崎高等師範学校の他分野の研究者ならびに東海地区の体育・教育関係者とのつながりを重視し、独自の体育観や学校体育のあり方についての構想を構築していくことを試みていたと考えられる。

一方で、本稿では次のような課題が残された。雑誌『体育文化』のそれぞれの記事の内容について、詳細な検討ができなかったことである。終戦直後の東海地区で、どのような体育の実践が行われていたのか明らかにすることは、日本の戦後学校体育の実践について、新たな観点を提供するものであるだろう。また、戦前・戦中・戦後と活躍してきた浅井浅一が、それぞれの時期で体育における思想や考え方

をどのように変化させていったのか、その背景や与えてきた影響なども鑑みて考察することはできなかった。浅井自身は岡崎高等師範学校時代のことについてほとんど言及していないため、今後これらの課題を明らかにしていることが必要になると考えられる。

注

- 1) 女子高等師範学校には、東京女子高等師範学校（1890年創設）、奈良女子高等師範学校（1908年創設）、広島女子高等師範学校（1945年創設）の3校があった。
- 2) この中等教員不足の問題に対して、文部省は臨時教員養成所の増設、「文検」と呼ばれた文部省検定試験の実施、私立大学卒業生への無試験検定認可などの応急的な措置を採っていたが、根本的な解決策としての高等師範学校の増設が望まれるようになった（山口，2004）。
- 3) 1944年7月に「科学技術者動員計画設定要綱」が閣議決定され、航空機等の生産増強のために「理科系学校ノ卒業生ノ増加ヲ図ル」とともに、「重要ナル工場事業場並ニ研究施設等ニ於ケル中堅技術者ノ短期養成ヲ図ル」ことが盛り込まれ、これに沿う形で理科系学科のみでの設置となった（山口，2004）。
- 4) 浅井は戦後の活躍に着目されているが、終戦直前の1944年に『国民錬成と体錬』を上梓しており、戦時体制下の国策に沿った体錬を推し進めた一人としてもとらえられている。入江（1986）は、浅井が論じる実存の体育を皇道の理念に即した体育であるとして批判した。浅井（1944）は、体育は我が国並びに大東亜新秩序の建設に重要な役割を持つようになってきており、我が国の実存の体育は「身体の日本精神的形成」であり、「皇国民の錬成」であるとしたうえで、競技会等を国家主義的にとらえ直して国民を臣民へと教化する好機とすべきとした。一方で、山本（2010）は、浅井の『国民錬成と体錬』の「内容は一見まさに『聖戦遂行』に凝り固まったように見え、当然批判的に読まざるを得ない」としながら、「随所に20世紀的思想も見受けられる」として、「戦前の浅井の体育観は、篠原助市の影響を受けながら『体育の教育学化』が考えられてきたが、戦後は体育の『科学化』を標榜するように」なり、「彼の人間観も、教育学化の

ときは『被教育存在』であったが、科学化になると、科学的に考えやすいように人間を『モノ』のように見る身体観へと変化しているように思われる」と指摘している。

- 5) 雑誌『体育文化』創刊号の著者と所属は、以下のとおりである（＊ 体育文化会会員）。

松原益太：岡崎高等師範学校校長

塩澤 幹：愛知県体育事務官

浅井浅一：岡崎高等師範学校教官＊

橋本正一：岡崎高等師範学校教官＊

岡部菊栄：愛知県刈谷高等女学校教官＊

加藤金作：愛知県第一中学校教官＊

能勢修一：愛知県第二師範学校教官＊

吉村三笠：愛知県第一中学校教官

愛知体育協会陸上競技連盟理事長

生駒 勉：愛知県学校衛生官

- 6) 浅井浅一は1949年に包括合併された名古屋大学教育学部教授に転籍し、その後岡崎高等師範学校が廃止となる1952年に奈良女子大学に移った。橋本正一と佐々木久吉は1949年にそれぞれ岐阜大学、愛知学芸大学（現愛知教育大学）へと移った。

引用・参考文献

浅井浅一（1944）国民錬成と体錬．教育科学社．

浅井浅一（1945）体育思想の発達．学徒体育，5（5）：8-11．

浅井浅一（1946a）体育方法論の開拓．新体育，6（2）：10-15．

浅井浅一（1946b）日本体育の新構想．新体育，6（3）：10-17．

浅井浅一（1946c）若き体育者へ．体育文化，1（1）：巻頭言．

浅井浅一（1947）新学校体育．更生堂出版．

浅井浅一（1961）体育と文化—運動文化論の根拠．

浅井浅一・川村英男・佐々木久吉・近藤英男・林 蔵，体育の哲学．黎明書房：pp. 9-21．

浅井浅一・橋本正一・佐々木久吉（1949）新しい学校体育．高須書房．

学校体育研究同好会編（1949）学校体育関係法令並びに通牒集．体育評論社．

橋本正一（1946）編集後記．体育文化，1（1）：35．

弘中栄子（1973）新体育の出発．前川峯雄責任編集，戦後学校体育の研究．不昧堂出版：pp. 22-77．

今村嘉雄（1974）浅井浅一君の長逝を悼む．体育の科学，24（10）：663-664．

入江克己（1986）日本ファシズム下の体育思想．不昧堂出版．

岸野雄三（1973）現代保健体育学体系5 体育史—体育史学への試論—．大修館書店．

近藤英男（1974）浅井浅一博士を偲んで．体育科教育，22（11）：54-55．

校誌発行委員会編（1950）岡崎高等師範学校誌．岡崎高等師範学校学生会．黎明会．

松原益太（1946）体育と文化．体育文化，1（1）：1-3．

中野光（2015）岡崎高師の源流を探る—水野敏雄初代校長を中心に—．黎明会編，岡崎高等師範学校七十年誌．黎明会：pp. 116-127．

丹羽劭昭（1996）戦後学校体育を支えた人たち 第3回 浅井浅一—体育の民主化・科学化をめざした人—．学校体育，49（6）：68-70．

岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編（1999）岡崎高等師範学校五十年誌．名古屋大学岡崎高等師範学校同窓会（黎明会）．

丹下保夫（1964）戦後における学校体育の研究—特に新教育制度までの体育について—．東京教育大学体育学部紀要，4：1-14．

梅田利兵衛（1974）浅井浅一先生の死を悼む．学校体育，27（14）：66-67．

黎明会編（1977）岡崎高等師範学校創立三十周年誌．黎明会．

山口拓史（2004）岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③—．名大史ブックレット 8．名古屋大学史資料室．

山本徳郎（2010）浅井浅一研究事始—体育は教育学か科学か—．奈良体育学会研究年報，15：25-30．